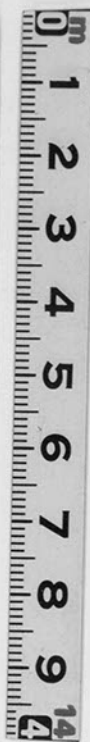


ポ プ ラ

第
七
號



イ
ワ
キ
ホ
プ
ラ
社
発
行



お月様へ
西の空
肩車
白西家

磐城 金成向之家君

自由壇

◎ 和歌

波津子

日もすがら檻褖さしけり慰さまぬ心の波をわし静めつゝ
強くなれつよくなれよと念じつゝ秋の大氣を深く吸ふ朝
しつとりと朝の狭庭はこゝろよししるき箒目散る風仙花
ひる下り静けき部屋の硝子戸に金線花はも淡くうつれり
亡き母によく似たりとて祖母が愛る我黒髪は悲しかり

◎ 俳句

百川を啜る涼味や心太
虫聞いてイむ丘やながれ星
名月や椽にすゝむる茶一服
名月に芋食ひながら語りけり
白百合や奴瀬十尺崖五丈
閑居の身此里涼し波の音
地獄谷曲りし松のしげりかな
涙して笑ふ夕餉の蚊遣かな

茅橋
一郎

桃李

新晴に蟬の初聲きく日かな
 一生をきらはれものゝ毛虫哉
 酔ひ心墨田の土手を風涼し
 雑踏を外れて涼しや河岸の風
 一本の棕櫚の眞上や夏の風月
 群て蚊の逃ぐる羽音や夕蚊遣
 朝寒を老いたる父のくさみ哉
 夕風の誘ふがまゝや萩の散る
 鼯鼠の影掬びたる清水かな
 石室や眼下に拜む夏の月
 漁花を敷へて磯の納涼かな
 傾城の轡に蠅とまりけり
 深山路や石に躓く杜鵑
 配達夫霧泳ぎ去り新聞の匂
 萩の下掃く箒木に弱き草が絡り
 馬が隠るゝ大東の草に快く唄ひ
 眼界閉されて此小屋の霧に押るゝ

芭滴

東天紅

一夢

雅山

千里

華明

新茅坊橋

東天紅

雀こぞりて飛ぶ空の正しく秋
 星一つ大きく光り秋近し
 馬賣りて厩淋しく秋暮れぬ
 妓の心我より去りぬほし祭
 此の村に賢人住めり花木僅
 行水や盥の中の子天地

◎ 川柳

前祝ひみつもつてゐる揮毫料
 徳利の講釋を種に飲む氣なり
 秋風が糸織をふく坑夫べや
 夏座敷待つて御座候女使者
 肩書にほれて娘は承諾し
 妾宅の朝顔鉢へ猫ねむり
 名物の積りで見てる笠踊
 タイピスト穩かならぬ事も知り
 すらくと洋書が讀める近視眼
 ビール瓶抜くに總身の馬鹿力

東宮殿下御歸朝を祝ふて

秋晴の日本中は旗の波
大温習たゝ熱心をきいてやり
夕顔の舌淋しく白う我に迫る
長男のやり場に優生學こまり
細帯が裸体をまねく新舞子



俳壇

秀逸

◎ 菜の花

(郡山) 三澤千里選

菜の花や堤に上れば川廣し
菜の花や京へ一日の瀛車の旅
菜の花や人氣立つたる村芝居
滑かに大河の畔や花菜畑
なのはなに避病舎低き眞晝哉

向 一 桃 秀

峰 夢 郎 李 峰

一 角

人位 同 同 地位 同 天位 軸

菜の花や誰か散らしたる蟹の殻
菜の花に瀛車道百里續きけり
百戸の村菜の花月夜朧にて
菜の花や瀬川囁く夕月夜
なのはなに偲ぶ舊都や塔高し
道問へば京へ三里の菜花咲く
菜のはなや遊學の途に上る君
菜の花の咲くや身輕き旅の人
眼の果は白帆一つや花菜畑
菜の花の中百本の電柱かな
菜の花の中に建てたる役場哉
菜花咲くこゝら二の丸三の丸
菜の花の中に音なき流れかな
菜の花を校外教授の群一つ
一本の花菜にも春の籠りけり

◎ 夏近し

(社中)

齋藤雅山選

疊換へて書齊の窓に夏近し

同 同 閑 岩 一 同 東 芭 桃 同 秀 一 一 千

人 人 月 月 角 人 紅 滴 李 人 蜂 角 郎 角 里 夢

人位
地位
天位

夏近き風が吹くなり湖畔亭
夏近き海に面して二階かな
馴染温泉の便りを受くや夏近し
麦藁帽山なす店やなつちかし
夏近しさやけき富士の姿かな
雨近し夏まで近くなりけり
馬買ふて戻る時やなつちかし
ぬりかへし舟の光るや夏近し
地ならして花壇廣むや夏近し
風に揺るゝ乾餾餛も夏ちかし
なつ近し洋傘白きくすり賣り
新調の漱水車なりなつちかし

◎ 通 卷

南紀眞々居先生選

向 朗 西 保 東 峰 同 向 芭 華
一 郎 山 天 天 天 天 天
峰 白 郎 翠 雪 紅 角 人 峰 滴 明
李 峰 角 紅 桃 秀 一 東 天

人位
地位
天位
追加

夏近し木の間かくれの御用邸
菜の花や土堤に上れば川廣し
菜の花のとびくゝに麥の廣野哉
菜の花や瀬川靜に夕つく日
夏近き空の青さよ出てゝ見ぬ

柳 壇



◎ 鳥

(旭川) 尾山夜半杖選

秀透
同

鹿の目が光る三越の窓ガラス
雷鳥は覺て孔雀の羽根を抜き
鳩の背を撫て飛ばせる淋しい日
呑み込めぬ様に鶉飼は教てる
心中の袂から出る折つた鶴
山雀の藝に見惚れる病上り
女てふ誇り孔雀のすそ模様

山 同 一 山 東 一
天 天 天 天 天
笑 角 人 笑 角 紅 角
笑 角 人 笑 角 紅 角

保 向 秀 岩 眞
翠 峯 峯 々 々
居 月 峯 峯 々

同 軸

くすぶつた鶴匠の顔に夜が白み
附け焼にする鳥がない小鳥店

◎ 散 歩

(大連) 大島 濤明 選

同 夜半 杖

ゆくりなく散歩で語る國の友

憂事も秘めて散歩へ足を曳き

草笛も散歩の杖の柏子なり

あこがれの空へ杖曳く夕まぐれ

あてもなく歩けば灯明るすぎ

白面の狐毎晩出てあるき

あの事を聞くに散歩を思つき

散策のステツキに犬ついて来る

成金と見えて散歩に派手な事

二人で散歩をすれば鳴く蛙

二ッ人であるけば瞳落びせられ

一と廻り歩いて来やう柏餅

用もなく出て盆栽が一つ殖む

散歩から犬の喧嘩も見て歸り

濤 同 同 虎 東 朗 桃 同 一 同 同 同 一 愚
明 人 人 棒 紅 白 李 人 夢 人 人 人 角 佛

同

散策の浴衣の柄に小うるさい

◎ 保翠氏長男祝吟 (一)

東京 寺井 尺一 選

夜商人喋りつかれて儲からず

人情も涙もあつて金がない

標札を打てば安心して這入り

祝の座唄ひ納めて夜があける

一番目見込み通りに男なり

長い坂だんぐ海がひろくなり

俄が雨男の下駄でかへるなり

新枕電氣のひかる恥しさ

産の番ぢれつたい程夜が長い

青二才とは思とも官吏なり

媒人に聞けば遊んで食へる筈

隠藝伯父は不思議の眼を見張り

長き夜を桶屋の叩く音ばかり

斯く無事で御座ると祝ふ年賀狀

坐つてりや十人並の女なり

一 同 劍 同 同 東 花 同 同 一 同 花 劍 同 東
突 天 突 天 選
角 人 坊 人 人 紅 笑 人 人 角 人 笑 坊 人 紅

格安のビラに女房二ご戻り
保険金落る火の粉に北叟笑み
昇給をして同僚と不和になり

産床を離れ嬉しい鬘を結び
保険金忤いさゝか氣がさがめ
若翠り淋しい心酒にする
親一人子一人町は黄昏がれる

有難い事に産婦は達者なり
同性の戀は醜い顔とかほ
長々と書いて結局無心なり
祝酒村一番の鯉をたて

父親に似た長男の悪い癖
女客産所へ御慶申上げ

里の母男が産れふれて来る

尺劍東虎東 花山虎と東花花東と同
突天 天 ん天 天ん
一坊紅棒紅 笑笑棒坊紅笑笑紅坊人

編輯子

△大島濤明先生から一句毎に有益なる御意見を

寄せられました。紙数の都合でのせません不

△自由壇には今後何んでものせまず奮つて御寄稿を

△本誌は非賣品ですが社に御同情の方は郵税共
金十二錢の割に御喜捨を得ばこの上なき幸で
す本社より呈上の分は別です

大正十年十二月二十五日發行

ボアラ第八號課題

△川柳

首

夜中

虫

△俳句

雁

師走

吉野詩秋選

只野閑月選

◎切十一月十五日嚴守

◎各題十句必らず題毎に別紙

◎難吟無制限

◎投句所 社内綿引東天紅宛

◆新年、難吟、俳句、川柳各十句

切十一月三十日

第九號課題

△俳句『初東風、加留多』

△川柳『犬、雪』

本社隔月發行(非賣品)

福島縣石城郡平町一丁目二〇番引方

發行所 ボアラ社

福島縣石城郡平町田七番地

印刷所 高橋活版所